



查讀研究論文

REFEREED PAPERS

1960年代における新聞と時間の関係をめぐる議論

—テレビへの対応としての発展と限界、そして可能性—

Discussions on the Relationship between Newspaper and Time in the 1960s:
Development, Limitation and Potentiality as a Response to the Spread of
Television

赤木孝次*

Koji Akagi

1. 本稿の目的と概要

1.1 ジャーナリズムの時間論の意義

本稿は1960年代における新聞界内部の議論、および研究者・評論家などの新聞に関する議論において、時間表現メディアとしての新聞のあり方や時間表現行為としての（新聞）ジャーナリズムのあり方をめぐり、どのような議論が展開されたのかを考察するものである。そのことを通じて、「ジャーナル（journal = 1日、日常）」の「イズム（ism）」を語源的な意味とし、本来的に時間と密接なかかわりを持つ行為であるジャーナリズムにおいて認識、表現されるべき「時間」とは何かについて論じるための議論の基盤、あるいはその手がかりを得ることが、本稿の目的となる。

この時期の新聞をめぐる議論が「ジャーナリズムと時間」論にとって重要な理由は、テレビの発展・浸透による新聞のポジショニングの変化にある。1953年のNHK東京テレビと日本テ

レビの開局に始まる日本のテレビ放送は、大量開局のピークとなる1959年を経て、1960年代に本格的に普及していく¹。既にラジオは存在していたものの、それまで速報メディアとしての自己認識に大きな疑問を抱くことがなかった新聞は、テレビの急速な発展・浸透を前に、みずからにとっての「時間」の意味を再考しなければならない状況に置かれることとなった。テレビに速報メディアとしてのポジションを奪われた（とみなされた）新聞の関係者は、新聞が表現すべき時間とは何かについて自覚的、対自的に考察することを迫られたのである。そのためこの時期には、新聞界内部において、また、新聞ジャーナリズムに関心を持つ研究者や評論家などの間において、それまでともすれば自明のものとして、惰性的にとらえられていた「新聞ジャーナリズムと時間」の問題をめぐる、さ

*東京大学大学院学際情報学府博士課程（投稿時）

キーワード：新聞、ジャーナリズム、速報性、詳報性、総合的・重層的時間

まざまな議論が展開されたのである。こうした議論からは、速報か非速報かという議論の枠組みにとどまらず、そもそもジャーナリズムが描くべき時間とは何か、という根源的な問題を指向する議論も生まれている。この時期の議論が、ジャーナリズムの時間論にとって重要な意味を持つゆえんである。

では、なぜジャーナリズムと時間の関係が問題となるのか。この研究の意義と狙いを論じる上ではまず、ジャーナリズムを時間表現行為ととらえる本稿の基本的立場について説明する必要がある。

実際、ジャーナリズムはこれまでたびたび、時間との密接な関係を指摘されてきた。たとえば、鶴見俊輔は論文「ジャーナリズムの思想」の中で、「ジャーナル」という言葉が元来、「毎日の記録」との意味において、日記とジャーナリズム（日刊新聞）の双方にかかわるものであり、「ジャーナリスト」という言葉には「日記をつける人」という意味合いが含まれると述べている²。日記をつける行為との近接性を指摘することで、ジャーナリズムがまずもって、時間の流れに沿って事象・事件の展開を記録する「時間表現行為」であることに注意を喚起した議論である。また、小山栄三は、アルトゥール・ショーペンハウアーが新聞を「世界史（歴史）の秒針」³と評したことなどに言及しつつ「新聞は日刊の年代記として世界史の各時相を連続的に、直接に、表現し、記録するものである」と述べている⁴。ジャーナリズムの原理を「現実行動性——時事性（actuality）」⁵と表現した戸坂潤の議論も、アクチュアルな時間意識や日常性を考察の

中心に据えるという意味において、ジャーナリズムの時間論の重要な先駆的視点だと言うことができる。

しかし、ジャーナリズムが時間（の展開）を記録し、表現しようとする主体的行為であることに着目したこれらの議論は、もちろん、ジャーナリズムがア・プリオリに時間をありうべき姿で、望まれる表現で記述しようと述べているわけではない。むしろ鶴見は、ジャーナリズム論の「重要な視角」の一つとして「同時代のできごとを正確に記録し、そのゆたかな意味をひきだすことをさまたげる力についての考察」を挙げている⁶。

そして、ジャーナリズムは時間を表現・記述する能動的行為であるとともに、時間によって制約される受動的行為でもある。現実の事象・事件は必ずしも、1日や1週間、あるいは数時間といった、ジャーナリズム的時間の区切りどおりに生成、展開するわけではない。連続した流れの中で展開する事象・事件を恣意的な時間枠によって分割し、その一定の枠内で集められた情報をもとに、そこから分かる範囲で「事実」の意味と構図を理解し、価値付けをして提示することにより、「ニュース」という生産物は作り上げられる。その意味で、時間とはニュースを作る最大の要素の一つである。この点について寺田寅彦は、（新聞）ジャーナリズムを「日々主義」「その日その日主義」と表現し、「その日の昼ごろまでの出来事を夕刊に、夜中までの事件を朝刊に」掲載するため、わずかな時間の調査でもっともらしく事象・事件を描写しようとするジャーナリズム生産の特異性が、ニュースの「類型化」をもたらすと批判的

に論じている⁷。

ジャーナリズムを時間との関係から考えるこれらの議論は、現実のメディア組織あるいはジャーナリストの思想的立場の違いを超え、その背景にあるジャーナリズムという行為の本来の意味に迫る契機を有している点に、特徴と可能性を指摘することができる。そして、時間表現行為としてのジャーナリズムが、現実の活動において時間をどうとらえ、どう表現しているのかを問う議論は「日々主義」「その日その

1.2 ジャーナリストにとっての時間——1960年代の新聞界

新聞、テレビ、雑誌など現場のジャーナリズム関係者にとっても、当然ながらジャーナリズムが時間と密接なかかわりを持つ行為であることは強く意識されてきた。

現場関係者にとって、時間表現行為としてのジャーナリズムの性格はまずもって、締め切りという象徴的な時間の区切りとして立ち現れる。個々のジャーナリストはこうした時間の区切りを前にして、自分の行為は決められた時間の範囲内で事象・事件を分断して表現する行為であることを、意識せざるをえない。そのことは、より身体的な日常の実感レベルの問題としては、端的には「忙しさ」として、時間に追い立てられる切迫感として意識される⁸。時間と密接なかかわりを持つ行為であるジャーナリズムに日夜取り組んでいる現場関係者、メディア組織やジャーナリストは、ジャーナリズムにおける時間表現がどうあるべきかについて最もよく考察しうる立場にあると言えるはずだが、彼ら／彼女らはまさにその多忙によって、みずからにとっての時間がどうあるべきかを考察する

日主義」としてのジャーナリズムという活動自体に対する批判的問い直しをも、可能とするものである。その意味から本稿は結論部分において、事象・事件をコマ切れに分割してとらえるジャーナリズムの一般的な時間理解に対して、時間の展開を過去から現在、そして未来へと重層的に流れる「持続」ととらえるよう主張したアンリ・バルクソンの時間論を、時間の認識方法における批判的対抗軸として提起することとなる。

時間を持つことができないという、逆説的な矛盾を抱えているのである。

さらに言えば、人間あるいは人間集団としての組織は通常、日々の仕事をこなすという慣習的な活動に追われるなか、みずからのありようを自覚的、対自的に問い直す時間を持つことができない。そうした自覚的な議論が展開されるのは、往々にして何らかの危機、あるいは外的状況が議論を強いる場合である⁹。そのことは、メディアやジャーナリストにおいても何ら変わるところはない。その意味から言うと、既に指摘したとおり1960年代の新聞界には、テレビの発展・浸透という、みずからにとっての時間の意味を自覚的に考察しなければならない客観的な状況が存在し、それゆえに結果として、ジャーナリズムと時間をめぐるさまざまな議論が展開されたと言えることができる。

そして、当時の新聞関係者の著書や論文、日本新聞協会の刊行物である『新聞研究』『新聞経営』『新聞協会報』の誌・紙上での発言などを見ると、本稿が対象とすべきこれらの議論は

1950年代後半にその萌芽が見られ、1960年代に本格的に展開されている¹⁰。

また、その内容は大きく、

- 1) 新聞が依然として速いメディアであることを立証しようとし、新聞の「速報性」を強調する議論
- 2) テレビの登場で速報メディアの地位が奪われたとの認識を含め、時間表現メディアとしての新聞の役割を「解説性」などの「詳報性」に移行させるべきだとする議論

——の二つに分類することができる。

ここで注意すべきは、新聞の速報性を強調する前者の議論の中に、当時の新聞界で進んだ技

術革新の結果としての新聞の速度の向上に可能性を見いだす主張が含まれている点である。この当時は、原稿を符号化して送受信し活字組版工程を機械化、自動化する漢字テレタイプと全自動モノタイプのセット、紙面データを丸ごと遠隔地に電送するファクシミリなどの新技術が登場し、新聞の世界でかつてない規模の技術革新が進展した時期でもあった。テレビの登場により新聞の速報メディアとしての地位が揺らぎ始めたまさにその時期に、新聞界の内部ではむしろ、新聞の速度の向上（製作工程のスピードアップ）が大きな関心を集め、新技術に合わせた編集局や記者の仕事の見直しが、盛んに議論されていたのである。

2. 速報性と詳報性をめぐる議論

2.1 速報性の主張と技術革新

テレビと異なる新聞独自の速報性とは何かを考察した当時の代表的な議論として、『新聞研究』1962年6月号に読売新聞社編集総務の金久保通雄が執筆した「テレビ時代における新聞の速報性」という論考がある。

金久保はまず「新聞は、ニュースの速報をあきらめようとしているという見方が、新聞の内と外にある。テレビが一千万台を突破し、ラジオもテレビとほぼ同じくらい普及したこんにちでは、新聞の速報性は無意味になりつつあるという意見が、新聞の速報性放棄論を生んでいる」とした上で「だからといって新聞が速報性を放棄してしまったら、もう新聞とはいえない。新聞は雑誌ではないのだから、速報性を放棄することは新聞の自殺にもひとしい。新聞

は、速報競争では放送にたちうちできないが、しかも、なお新聞には、新聞独自の速報性がある」¹¹と述べる。

その上で金久保は、ラジオ・テレビの視聴者は「一定の放送局のニュースを視聴しているわけではない。また視聴する時間もまちまちで、聞く時も聞かない時もあるというのが普通」であることから、放送では毎日のニュースを継続的、系統的に知ることができないと述べ、それに対し「記録されたニュース」を届ける新聞では「読者は毎日継続的に、系統的にニュースを知ることができる」とする。こうした見方に、併せて当時のニュース番組の視聴率の低さを論拠に挙げ、金久保は「読者、つまり国民大衆が、ニュースを主として新聞によって継続的

に、系統的に知ろうとしているのだから、新聞はニュース報道の中心的な機関として、読者に一刻も早くニュースを伝達する義務があるわけで、新聞の速報性は時代とともにますます重要になってくる」¹²と論じている。新聞の速報性の重要性を主張しつつも、新聞とテレビのどちらがより速報的かという比較を巧妙に回避した議論とも言える。

また、金久保はこの年（1962年）の5月3日午後9時35分に発生した国鉄常磐線三河島駅の二重衝突事故では「朝になって新聞で事件を知った人が多かった」と述べている。このころ、テレビ放送自体は午前零時近くまで行われていたものの、当時のテレビの現場中継能力からすると、同日中に三河島事故を本格的に報道することは難しかったからである。そして金久保は、テレビが放送されていない時間帯の事件では新聞が速報性を発揮する、という議論を展開している¹³。こんにちの目から見るとやや奇異に思えるものの、これも当時においては、説得力を持った新聞の速報性の論拠であった¹⁴。

これらに続き金久保は、テレビが登場したとはいえ、技術革新により新聞の速報性が一層高められているため、新聞の速報メディアとしての地位は不変であるとの議論を展開している。すなわち金久保は、現場の取材機器の性能の向

2.2 詳報性と解説性

先の金久保の論考にはまた「新聞も、放送と同じように事件の第一報の速報を心がけなければならないが、新聞の速報性は、第一報と同時に、事件や問題の背景や問題状況の速報をつねに心がけなければならない」¹⁷との考えも示さ

上にまず触れた上で、ファクシミリなどの新技術を活用して1959年以降、全国紙3紙が北海道などでの現地印刷を開始したことを「新聞の速報性の飛躍的な前進である」と述べている¹⁵。

金久保だけでなく当時の新聞関係者の間には、新聞の速報性の論拠に新技術を挙げ、テレビへの対抗策として、さらなる技術革新の遂行を主張する議論も多かった。たとえば、中部日本新聞名古屋本社印刷局次長の寺村二郎は、『新聞経営』第22号（1968年）に掲載された論考「新聞製作体制革新の展望」の中で「ニュースの速報性に関する限り、いまや新聞は、テレビ・ラジオに大きな差をつけられているというほかない」とする。そして、編集内容について読者の要望を満たすことは新聞社の人間の工夫や努力によってある程度可能だとはいえ、速報性という問題を解決する上では工学的な技術革新が決定的な役割を演じるとし「このような見地から、いまや新聞製作の機械化と工程の合理化が、全面的に検討されねばならない」¹⁶と述べている。寺村の主張は、技術者としての真摯な意見ではあるものの、技術革新に高揚し、新技術に自らの将来を仮託しようとする面があった当時の新聞界の意識（空気）を現す言説として、位置付けることもできよう。

れている。「新聞は、ニュースの速報をあきらめようとしているという見方」に反論し、速報メディアとしての新聞の意義や役割を多角的に主張しようとした金久保の議論は、結果として、詳報性・解説性など、むしろ速報主義の対

極の議論に接近したとも言える。

実際この当時には、テレビと異なる新聞の速さを再定義しようとする議論があった一方、速報より詳報や解説などを新聞の特性として重視する議論も広がりを見せていた。

1962年の9月に開かれた日本新聞協会の第34回新聞講座における座談会で、読売新聞社の編集総務・渡辺文太郎は「今日の新聞は速報のトップにはいないから、解説が必要であり、記者は評論家化してくる。速報よりも読者にわかりやすく伝える能力が必要であり、それにふさわしい知識が必要だ。社会的事件を扱う場合も、その背後にある社会的原因や影響に考えを及ぼしうる記者が必要」だと述べている。また、同座談会で朝日新聞東京本社社会部長・田代喜久雄は「新聞は速報性をラジオ、テレビにゆずったから、記録性、反復性、随意性などの他の機能を発揮しなければならない」と主張し、テレビは背後にあるものを伝えられないとの見方を示し、新聞はその点を追求すべきだと述べている¹⁸。

詳報性の中では特に、新聞の「解説性」に力点を置いた議論も多かった。サンケイ新聞社（現・産経新聞社）論説委員の山本文雄は著書『新聞編集論』の中で、「電波メディア」（放送メディアと同義＝筆者注）は速報性を特色としているものの「（ニュースを）受け入れ側の都合とは関係なく送りこんでくる」のに対し、「新聞は一人で落ちついて考えながら読むことができるので知識のとり入れかたが違う」とする。そのため、新聞は「第二報主義」に重点を置いて、解説にますます力を入れていくべきであると主張し、前夜のプロ野球のナイター勝敗

をテレビで知っている人が翌日、熱心にスポーツ欄を見たり、スポーツ新聞を読んだりしているのは、人々が新聞に詳しい解説を要求していることの証左だと述べている¹⁹。朝日新聞出身の佐藤信も著書『新聞を批判する』の中で、「電波時代の新聞の役割」は「第二報主義であるべきだ」とし、新聞はテレビが伝えきれない複雑な話を提供しなければならない、と論じている²⁰。この「第二報主義」という言葉は、当時の議論においてキーワード的に頻出した。第一報はテレビに任せて、新聞は第二報となる解説や背景分析に力を入れるべきだという意味で使われることが多かった言葉である。

そうしたなか、新聞協会報1967年1月1日付には「読み物記事」をテーマにした座談会が掲載されている²¹。各社の編集局次長、特集版編集長らが集まり、テレビの拡大に伴う新聞の立ち位置の変容という問題も踏まえ、読み物記事の意義に関する議論を展開したもので、詳報性・解説性など、第一報の速報と異なる時間表現行為への指向が長めの読み物記事に対する注目につながった状況を、見て取ることができる。

なお、解説や「第二報主義」の重要性を挙げる渡辺や山本も、技術革新による新聞の速度の向上とその可能性に言及している点には、注意が必要である。すなわち、渡辺は「過渡期、混迷期」にある新聞が新しい方向性を見いだす上で「技術革新の進行は注目してよい問題だと思う」²²と述べており、山本は、漢字テラタイプが新聞の世界に「驚くほどのスピードアップ」をもたらし、ファクシミリは「日本新聞史上として、まさに画期的な革新」²³であると論じて

いる。この時期の詳報論、解説記事論はまだ、新聞が「(それ以前と比べて)速いメディア」になったことに伴う自信や高揚感を背景にし

2.3 スクープと速報概念のとらえ直し

「第二報主義」論を典型として、もはや新聞が速報メディアとしての独占的な地位を奪われた以上、これまでとは違うニュース媒体、時間表現メディアとしてのあり方を模索すべきだという議論は、次第に広がりを見せるようになるが、当然のことながら、それに対する反論、アンチテーゼも展開されるようになる。テレビがすっかり速報メディアとして定着した1969年に、「第二報主義」論に代表される一連の議論に対し、「スクープ第一主義」を唱えたのが、『新聞研究』1969年5月号に掲載された朝日新聞西部本社編集局次長の伊藤牧夫の論考「現代のスクープ」である。

同論考は「速報性という問題について果たして新聞はテレビにはかなわないのであろうか。一般的には確かにテレビが優位に立っている。しかしそれはあくまでも物理的スピードにすぎないのである。瞬時にして消える画像を高速度で運搬するにすぎない。問題は何を伝達するかということにある。にもかかわらず今日、テレビにはかなわないとする新聞側の俗説は、物理的手段とニュース内容を明確に区別せず、両者を混同して考えているところから出発しているのではないか」とする。そして「重要なのはむしろニュース内容であり、ニュース材料として何をとらえるかということである。すぐれて価値のあるニュース材料をテレビがとらえない限り、いかに伝達方法が猛スピードであるとし

た、付加的な取り組みの推奨という域を出るものではなかった。

てもそれは手段にとどまるのであって、ニュース材料がなければ猛スピードの威力を発揮することはできない。きわめて自明の理でありながら、テレビがもたらした情報伝達革命のはなばなしさに気をのまれ、テレビにはかなわないという錯覚に陥っているのが今日の新聞である」と述べる。

その上で伊藤は、「ニュースではかなわないから解説を」「速報よりも正確さを」などと一方で主張しながら、他社に大スクープがあれば「新聞はやっぱり特ダネ」だと反省し、両者の間を右往左往しているのが今日の新聞である、と指摘した上で「スクープとは高い価値のあるニュースを独占的に速報することである」として「断固としてスクープ第一主義の道を選ぶことがテレビに対する不安を解消させる最もよい方法であろう」と主張している²⁴。伊藤はここで、アメリカ軍の原子力空母エンタープライズが日本海を航行している様子を発見、特報した朝日新聞の記事²⁵など、新聞がテレビに先行して報道したスクープの事例を挙げ、自己の論拠を展開している。確かに当時においても、またこんにちにおいても、新聞社の取材力は依然として強く、テレビや他のメディアに全く登場していない事実を新聞がいち早く報道する事例は決して少なくない。とはいえ、そのことは基本的に、新聞社の取材態勢や記者の資質の問題であり、新聞という時間表現メディアの本質を

意味するものではない。すなわち現実の問題としては、テレビが新聞の報じていない事実を報じることもあり、最近であれば、インターネットメディアの報道が新聞、テレビに先行するこ

ともある。その意味で伊藤の主張は、新聞の媒体特性に基づく議論とはなりえていない面がある。

3. 総合的・重層的時間論の萌芽と可能性

3.1 渡辺喜蔵と森恭三の議論

物理的な遅速でなく、世に知られていない事実を発掘することに「速さ」の意味を見いだそうとした伊藤によるスクープ概念のとらえ直しの議論を含め、テレビの登場を機にみずからの時間表現のありようを再考したこれら新聞関係者の議論は、それまでの固定化した速報中心主義を相対化する意義を持ったと言える。しかし、結局のところこれらの議論は、新聞は速報と詳報のいずれに立つべきかという議論の枠組みから抜け出すことはなかった。鶴見や小山の議論に立ち返って考えるならば、(新聞)ジャーナリズムと時間の関係をめぐる最も根源的な問題は、日記をつける行為、あるいは日刊の年代記としての(新聞)ジャーナリズムが、どういう時間を描いているのか、どういう視点で時間の展開を描こうとしているのか、ということである。速報か詳報かという議論はそうした根源的な問題を解決するものではない。なぜなら、寺田の言う「その日その日主義」としてのジャーナリズムの弊害が事象・事件への(長期的視野を欠いた)条件反射の対応にあるとするならば、私たちは、そうした問題を含む詳報や解説記事が存在しうることもまた、経験的に知っているからである。その意味から言えば、1960年代の新聞をめぐる議論からジャーナリ

ズムの時間論を深化、発展させる道筋を得ようとする本稿の立場にとっては、数こそ少ないもののこの時期に、速報か詳報かという枠組みにとどまらず、そもそもジャーナリズムが描くべき時間とは何かを問う形の議論が展開されたことが重要である。

そうした議論をここでは「総合的・重層的時間論」——より正確に言えばその萌芽的議論——と概括する。これらはすなわち、時間を固定化した点、固定化した相ととらえるのではなく、過去から現在を経て未来に向かう重層的な流れの中でとらえるよう求める議論である。先に、連続して展開する事象・事件を恣意的な時間枠によって分割して理解するジャーナリズムを批判的に評した寺田の議論に言及したが、その意味からすると、総合的・重層的時間論はジャーナリズム的時間のありようを根本から問い直す議論だと言うことができる²⁶。

思想の科学研究会会員でジャーナリストの渡辺喜蔵は、『思想の科学』1965年2月号に掲載された論考「虚報からの回復——核時代のジャーナリストの使命——」の中で、新聞が持つべき時間意識に関連して「総合報道態度の確立」という主張を展開している。渡辺は「新聞報道の主要位置を占めるのは、ある出来事なり

状況の結果としての事実、きわめて断片的なニュースである。分業化され、分割化された記者と報道の機能は、ますます微視的となり、われわれをとりまく環境——現実状況との関係は疎遠になる。ゆったりと、大きく変化する歴史的環境と、小刻みに、スピード感をもって変化する社会環境との関連をとらえにくくする」と述べた上で、「現実状況のなかから一つの問題意識をさぐりあて、その諸事実を組み立て、総合して示すことによって、問題の所在をさぐるうとする態度」としての「総合報道態度」の重要性を挙げる²⁷。

渡辺によれば「ひとつの事実は、現実状況の中の『点』であり、一次元の世界にとどまる。いくつかの事実を提示するということは、この『点』を結んで二次元の世界に進むことである。問題によりA点群とB点群を結びつけることは、三次元へと立体化することである。いまの時点で、また地点で、われわれをとりまく環境の変化をとらえ、その動きの方向をさぐるうとするとき、当然この方法きりない」という。また「ここでは、かならずしも速報主義は、必要としない」とされる。そして、総合報道に必要なのは「ジャーナリスト一人ひとりの、パースペクティブの回復」であり、コマ切れのニュースにかじりつきながらも「全体的状況をとらえようとする努力」だとしている²⁸。渡辺の議論はむしろ空間論に傾斜しているとも言えるが、その問題意識の根本にジャーナリズムの時間意識の問い直しが存在したことは明らかである。

新聞界の内部で早い時期から、こうした総合

的・重層的時間論の萌芽と言うべき主張を展開していた人物として、朝日新聞で論説主幹などを務めた森恭三がいる。森は『中央公論』1966年6月号に掲載された講演録「新聞人の責任」の中で「広い視野と、歴史的感覚」の必要性を挙げた上で、自身が「問題を頭の中で練っていく」流儀として、「自分が直面する問題を中心に縦の軸と横の軸を引く」方法について説明している。森によれば、縦の軸とは「その問題がどうして起こったのか、つまり背景の検討」であり、横の軸とは「その問題が現在の世の中でのどのような位置を占めておるか、つまり横のつながりを検討すること」²⁹であるため、「縦の軸は歴史、横の軸は社会地理」と言い換えることもできる。縦の軸を下の方へ伸ばすことは未来に続き、将来の見通しを考えることになる。横の軸を左の方へ伸ばしていくと国外に続き、国際的視野で考えることにつながる。「日本のナショナル・インタレスト（国民の利益）」を原点として縦の軸と横の軸を引き、前の軸との関係を検討するのが森の方法だという。

森はナショナル・インタレストについて、決して一つではなく複数の考え方があり、ナショナル・インタレスト自体も歴史的かつ国際的な視野で考える必要があると述べているものの³⁰、なおその議論には、ナショナルリズムによる思考の束縛と時代的限界を指摘せざるをえない。とはいえ、事象・事件を歴史や未来との関係性の中に位置付けてとらえるよう求める主張には、ジャーナリズムの時間論の見地から、可能性を認めることができる。

3.2 ベルクソン時間論との関連性

本稿が「総合的・重層的時間論」と評したこれらの議論は、時間概念のとらえ方、あるいは認識態度において、時間を「持続」あるいは「純粹持続」として、重層的に展開する質的变化をとらえるアンリ・ベルクソンの議論と通底する。すなわちベルクソンは、純粹な持続のありようを音楽的経験になぞらえ「ちょうど一つの点を他の点と並置するようなくあいには並置することなく、あるメロディーの構成音をいわば一体となって融合したまま思い起こすときのように、先行する諸状態と現在の状態とを有機化」する状態であると述べ、音楽的経験においては、音が継起する場合に「われわれはやはり一方の音の中に他方の音をも認めるのであって、それらの音の全体は、その身体各部に区別はありながら、お互いの結びつきの効果そのものによってそれらが浸透し合っている」のであり、時間の考察においては、そうした重層的な質的变化をとらえていくことが重要であると論じている³¹。これをジャーナリズム論に援用するならば、事象・事件をコマ切れに表現せざるをえない限界を認識しつつも、時間の重層性や相互浸透性を意識し、物事の意味を有機的にとらえるよう求める議論へとつながるからである。

ここで「総合的・重層的時間論」がまずもって時間の認識の問題である点に留意されたい。起きた出来事の記述方法が速報であるか、解説記事や読み物記事などの詳報であるかではなく、出来事が常に歴史的な文脈の中にあり、未来への展望や不安を内包していることを重視する認識態度こそが、重要だということである。

個別事象を反芻なしに報道して事足りりとするのではなく、歴史的、全体的な文脈の中に位置付け直してとらえることで、ニュースは深さと多面性を持つことができる。

一方、研究者の立場、あるいは情報の読み手の立場から、新聞に「総合的・重層的時間」を表現する方法論の確立を求めた議論として、『新聞研究』1969年1月号に掲載された田中靖政（学習院大学教授）の論考「情報社会における新聞の課題」がある。田中はまず、MIS（Management Information System＝経営管理情報システム）など当時の工学技術の発展を踏まえ、将来的には過去の新聞がすべてデータバンクに収められ、必要に応じてファクシミリで受信することも可能になるとの展望を示す。その上で、従来の新聞が「現在」だけに重心を置いてきた点に問題を提起し「新聞が大衆の欲求や必要を満たし、大衆に力の根源である知識を供給することを目標とする以上、新聞が扱う時相を『現在』（に関する情報の提供）から『過去』（の情報検索システムの確立）と『未来』（の予測に役立つ情報の生産）の両方へ拡大することは、今まで多かれ少なかれ新聞がはたしてきた機能を強化すること」であると述べている。「『過去』と『現在』と『未来』にわたる情報の『速報』と『詳報』とを第一義な目的とする」という情報技術の発展を踏まえ、新聞の情報提供方法のあり方を見直すべきだというのが、田中の主張である³²。ニュースの書き手の立場から時間の重層性の認識を求める渡辺、森の議論と、読み手の立場から時間の総合的・重層的理解の意義を訴える田中の議論は、

望まれるジャーナリズムの時間論への接近方法として、相補的な関係にあると言うことができ

4. 結論

以上、テレビの発展、普及を直接の契機として1960年代に展開された新聞と時間をめぐる議論を概観してきた。ここから得られる知見についてまとめておきたい。

まず新聞界内部の主流の議論について言えば、テレビにどう対抗するかという問題意識に動かされる形で展開された議論の広がり、多様性に注目する必要がある。これらの議論は、最終的には速報と詳報のいずれに立つべきかという枠組みに収斂してしまい、ジャーナリズムの時間の根源的な問題にまで到達することはなかった。しかし、この時期の新聞関係者の議論を過小評価すべきではない。従来の速報中心主義を相対化し、新聞の時間の意味を拡大したこの当時の議論には、その後の新聞関係者による時間の表現方法をめぐる実践的議論の原型がほぼ出揃っており、今日的意義を見いだすこともできる。

その上でやはり、時間表現メディアとしての自己認識を根本的に問い直し、ジャーナリズムの時間論をその根源に至るまで掘り下げる好機にあった当時の新聞界が、その契機を十分に生かすことができなかつた点には、問題点を指摘しなければならない。既述のとおり、その大きな理由の一つは技術革新にある。新技術による速度の向上は、新聞関係者の危機意識を縮減する効果を持ち、そのことは結果として、新聞のありようをめぐる議論から切迫感を奪うことと

るだろう。

もなった。一方、そうした中でも、速報・詳報論の枠組みに収まらない総合的・重層的時間論と言うべき議論が存在したことは、既に論じたところである。

問題は、そうした時間の重層性をジャーナリズムの中で、どのように実現していくかである。たとえば、渡辺は取材体制の見直しを挙げ、森は記者の自己研鑽の重要性を論じているが³³、これらに加え、技術の進展によるインフラストラクチャーの整備を踏まえてニュース提供のあり方そのものを見直す方法論にも着目すべきである。本稿はこれまで、1960年代において技術革新がジャーナリズムの時間論に与えたネガティブな効果を指摘してきた。たしかに、技術を口実にして議論の掘り下げを怠るべきではないが、望まれるジャーナリズムの実現のために利用可能な技術を最大限活用するのは重要なことである。その意味から、先に挙げた田中の議論を踏まえて今日の状況をみると、情報の体系化や検索、相互関連付けなど、デジタル技術の発展を、ジャーナリズムの時間論を問い直す有効なツールととらえることもできる。

個々のメディア組織、ジャーナリストが時間の重層性を意識することと、オーディエンスが重層的な時間の読みを意識することが相まって、ジャーナリズムに時間の多様性を実現することが可能となる。そのために新聞社を含むメディア組織は、オーディエンスの重層的な読

みに寄与する情報提供のあり方を模索する必要 「ゆたかな意味をひきだす」(鶴見)可能性
があろう。そうした取り組みの集積が、時間の 拓くもの考える。

註

- 1 日本におけるテレビの発展史を辿る上では、日本放送協会放送史編修室『日本放送史(上・下)』(日本放送出版協会、1965年)、日本民間放送連盟『民間放送三十年史』(日本民間放送連盟、1981年)などが参考となる。
- 2 鶴見(1965/1975)、339頁。
- 3 Schopenhauer, 1851(1973)、308頁。
- 4 小山(1969)、45頁。
- 5 戸坂(1934/1966)、131頁。
- 6 鶴見(1965/1975)、360頁。
- 7 寺田(1934/1948)、237-239頁。
- 8 1915年(大正4年)の杉村楚人冠『最近新聞紙学』において、既に「編輯の締切時間、郵便の発着時間など、すべて新聞社の仕事は、時間を生命として一分一秒の微を争う。こういう仕事に従事する者は、瞬時も時間ということ、頭から離しては困る。何を忘れても、時計を手離しては、その任の半ばを尽し得ない」との記述がある(同書1970年再刊版79頁)。少なくとも近代ジャーナリズムのシステムが産業的、技術的に確立された時期以降、ジャーナリストという存在は常に、時間の切迫感のもとに置かれてきたと言える。
- 9 社会や人間の認識の変化をもたらす契機としての「危機」についてMorin, 1984(1990)がある。
- 10 日本でテレビ放送が開始された1953年から数年の間、テレビは新聞関係者から、新聞の時間に影響を与える存在とは認識されていなかったようだ。その理由としては、当時のテレビがまだ、映像編集に多大な時間がかかるほか、中継機材の可搬性に限界があったことなどから、新聞を脅かす「速報メディア」とみなされていなかったという点がある。1960年前後には放送技術の進歩により、テレビは速報メディアとしての性格を明確に示すようになる。もともと、こんにちにつながる速報技術の出発点としては、1970年代のENG(Electronic News Gathering)システムの登場を挙げるのが、放送技術論の一般的な見方である。水越伸「情報テクノロジーの革新とマス・メディアの相貌——ENG、SNGシステム導入と放送メディア——」『マス・コミュニケーション研究』45号(1994年7月)に詳しい。
- 11 金久保『新聞研究』(1962)、20頁。
- 12 金久保『新聞研究』(1962)、20-21頁。
- 13 金久保『新聞研究』(1962)、21-22頁。
- 14 山本(1964)も「テレビが放送されていない時間帯の事件」では「新聞が速報性を発揮する」という金久保の議論に賛同している(同書260-261頁)。
- 15 金久保『新聞研究』(1962)、23頁。
- 16 寺村『新聞経営』(1968)、31頁。
- 17 金久保『新聞研究』(1962)、23頁。
- 18 「座談会 新聞の将来とこれからの新聞記者 新聞講座から」新聞協会報1962年10月8日付4面。
- 19 山本(1964)、259-260頁。
- 20 佐藤(1968)、217-218頁。
- 21 「読み物記事はどう変わるか 独自の企画で個性を ニュースに密着した方向で」新聞協会報1967年1月1日付4面。しかし、この時期の読み物記事論には議論の端緒、萌芽的議論としての印象をぬぐいえない。実際この座談会が読み物の具体例に挙げているのは新聞小説、釣りや旅行の記事、ラジオ・テレビ欄のあり方などであり、ニュース記事、ハードニュースの報道に関する掘り下げた議論は見られない。
- 22 注18)参照。
- 23 山本(1964)、157-159頁。
- 24 伊藤『新聞研究』(1969)、26-27頁。

- ²⁵ 朝日新聞 1968年1月29日付1面、15面。
- ²⁶ もちろん、過去から現在、未来に至る事象の展開を合目的性や理性的発展の概念からとらえる議論は、慎重に避けなければならない。時間に合目的性を見いだそうとする立場を批判し「歴史の非連続性」を唱えたミシェル・フーコーの理論を知る上で、Foucault, 1969 (1981)。
- ²⁷ 渡辺『思想の科学』(1965)、32-33頁。
- ²⁸ 渡辺『思想の科学』(1965)、33-34頁。
- ²⁹ 森『中央公論』(1966)、156-157頁。
- ³⁰ 森『中央公論』(1966)、157頁。
- ³¹ Bergson, 1889 (1990)、96-97頁。
- ³² 田中『新聞研究』(1969年)、19頁。
- ³³ 渡辺『思想の科学』(1965)、34頁、森『中央公論』(1966)、155-156頁。

参考文献

- 伊藤牧夫(朝日新聞西部本社編集局次長)「現代のスcoop」『新聞研究』第214号(1969年5月号)
- 梶谷善久『読者にとって 新聞とはなにか』ダイヤモンド社、1967年
- 金久保通雄(読売新聞社編集総務)「テレビ時代における新聞の速報性」『新聞研究』第131号(1962年6月号)
- 小山栄三『新聞学原理』同文館出版、1969年
- 佐藤信『新聞を批判する』潮文社、1968年
- 清水幾太郎「ジャーナリズム」(1949年)『清水幾太郎著作集9』講談社、1992年
- 田中靖政(学習院大学教授)「情報社会における新聞の課題」『新聞研究』第210号(1969年1月号)
- 鶴見俊輔「ジャーナリズムの思想」(1965年)『鶴見俊輔著作集3』筑摩書房、1975年
- 寺田寅彦「ジャーナリズム雑感」(1934年)『寺田寅彦随筆集 第四卷』岩波文庫、1948年
- 寺村二郎(中部日本新聞名古屋本社印刷局次長)「新聞製作体制革新の展望」『新聞経営』第22号(1968年)
- 戸坂潤「新聞現象の分析」(1934年)『戸坂潤全集 第三卷』勁草書房、1966年
- 森恭三(朝日新聞社論説主幹)「新聞人の責任」『中央公論』1966年6月号
- 山本文雄『新聞編集論』東明社、1964年
- 渡辺喜蔵「虚報からの回復——核時代のジャーナリストの使命——」『思想の科学』第35号(1965年2月号)
- Bergson, Henri *Essai sur les Données Immédiates de la Conscience*, 1889 ベルクソン(平井啓之訳)『時間と自由』白水社、1990年
- Foucault, Michel *L'archéologie du Savoir*, Éditions Gallimard, 1969 ミシェル・フーコー(中村雄二郎訳)『知の考古学』河出書房新社、1981年
- Morin, Edgar *Sociologie*, Librairie Arthème Fayard, 1984 エドガール・モラン(浜名優美・福井和美訳)『出来事と危機の社会学』法政大学出版局、1990年
- Schopenhauer, Arthur *Zur Metaphysik des Schönen und der Ästhetik, Parerga und Paralipomena: kleine philosophische Schriften*, 1851, Zweiter Band ショーペンハウアー(秋山英夫訳)「美の形而上学と美学によせて」『ショーペンハウアー全集13 哲学小品集(IV)』白水社、1973年



赤木 孝次 (あかぎ こうじ)

1970年8月生まれ

〔最終学歴〕早稲田大学政治経済学部政治学科卒業
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻博士後期課程単位取得退学

〔専攻領域〕ジャーナリズム研究、メディア研究

〔著書・論文〕

『ジャーナリズムの社会学』（共訳）リベルタ出版、2006年

『新版 概説マス・コミュニケーション』（共著）学文社、2010年

『技術とジャーナリズムをめぐる新聞界の議論——1950年代末から1960年代にかけての技術革新期の考察——』〔情報学研究〕80号、2011年

〔所属〕東京大学大学院学際情報学府博士後期課程（投稿時）

〔所属学会〕日本マス・コミュニケーション学会、日本ポピュラー音楽学会

Discussions on the Relationship between Newspaper and Time in the 1960s: Development, Limitation and Potentiality as a Response to the Spread of Television

Koji Akagi*

Abstract

This paper investigates the discussions that surfaced in the Japanese newspaper world and among researchers and critics in the 1960s, concerning newspapers as the “time-expressing media” and journalism as the “time-expressing conduct.” Thus, this paper aims to find the basis, or the evidence, to consider the desirable relationship between journalism and time.

This paper targets the discussions regarding newspapers prevalent in the 1960s, as it was around this time that the positioning of newspaper changed as a result of the advent and spread of television. Television broadcasting in Japan began in 1953 and by the 1960s its reach had spread largely. With the spread of television, newspapers fell into a situation that required them to reconsider the concept of time. This situation gave rise to various discussions on the relationship between journalism and time.

On the one hand various discussions emphasized the importance of commentary and detailed reporting rather than fast reporting. On the other hand, there existed a discussion to promote the view that fastness primarily meant to report unknown facts rather than to report those fast (i.e., if someone else did not report a fact, the journalist who reported the fact was considered the fastest). Although these discussions presented a new perspective on the “speed” of news and relativized conventional speed-centrism in the newspaper world, they did not exceed the discussion framework which comprises fastness and detailedness. A noteworthy fact is the existence of a discussion style that appreciated time synthetically, and as the multilayered amalgam of the past, present and future.

*Doctoral Course, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo (at the time of submission)

Key Words : Newspaper, Journalism, Fastness, Detailedness, Synthetical and Multilayered Time.